



JSPS STOCKHOLM

Newsletter 66号



CONTENTS

01 プロローグ

我が道を行くスウェーデン

JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本忠治

着任のご挨拶

井手真二 副センター長、田島マリカ 現地職員

07 北欧・バルト三国で活躍する日本人研究者の紹介

カロリンスカ医科大学 館明日香

03 活動・訪問記録

第4回Norway-Japan Academic Network

第5回Japan Alumni and Researchers Assembly

JSPSフィンランド同窓会幹部会

エストニア：タリン大学、タリン工科大学

09 学術動向

ノーベル賞2020 発表日が決定

世界大学ランキング（北欧諸国）

STINTが日本の大学との国際研究協力促進事業11件採択

KVA会員を全欧アカデミー理事に選出

北欧諸国、新型コロナウイルス研究への特別助成を決定

05 セミナー報告

第8回Sweden-Japan Academic Network

スウェーデン宇宙物理研究所 二穴喜文

第4回Norway-Japan Academic Network

ノルウェー食品研究所 古賀詩織

12 お知らせ

公募情報

二国間交流事業

研究拠点形成事業

外国人招へい事業

我が道を行くスウェーデン

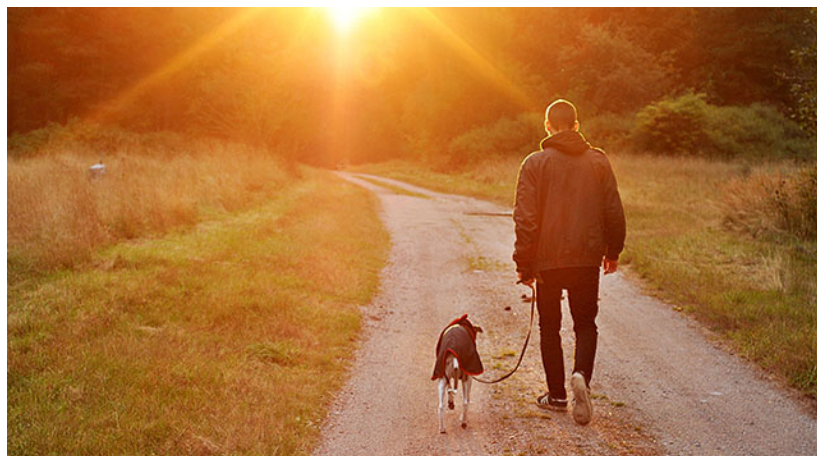
JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本 忠治

現在、何を書くにしても、何を話すにしても新型コロナウイルス (Covid-19) は避けて通れない話題であろう。本ニュースレターも影響を被って春夏合併号として刊行せざるを得なくなった次第である。昨年暮れには既に中国で感染者が出ていたようであるが、個人的には3月中旬まではこんなに日々の生活や活動を激変させる大事になるとは思っていなかった。例えば、3月6日にJSPSデンマーク同窓会総会とJapan Alumni and Researcher Assembly がコペンハーゲン大学で開催された(当ニュースに報告あり)。それに参加するため、小生は国際協力員と一緒にストックホルムとコペンハーゲンの間を日帰りで行ったが、大学でも空港でも厳しい規制の動きは感じられなかった。ただ、一部参加予定者が大学から大人数の集会への参加を止められたとのことで欠席し、すでに規制の予兆はあり小生が鈍感であっただけかも知れない。ところが、その一週間後、3月13日にデンマークはロックダウンに入り多くの飛行便がキャンセルとなった。それと前後して、ノルウェーとフィンランドでも厳しい制限が導入された。ウェブニュースによればイタリアやスペインのみならず、ドイツやフランス、さらに遅れてイギリスにもロックダウン規制が敷かれ、連日厳しい外出制限の様子が報じられた。

ところが、スウェーデンではそのような動きはほとんどみられなかった。大学や高校では講義はon lineの遠隔講義に切り替えられたようであるが、小中学校はほぼ通

常どおり開いていた。また、レストランやカフェもほぼ普通に営業を続けていた。ただ、social distancing と呼ばれる人と人の間隔をあけることや70歳以上の高齢者はhigh risk groupということで、できるだけ家に居る(stay at home)ことが呼びかけられた。ただ、これは推奨 recommendationであって強制力のあるものではなかった。小生はこのhigh risk groupに入るので公共交通機関は避けた方が良くとのことで3月下旬からバス、地下鉄は乗らずに毎日徒歩でオフィスに通うことにした。この片道30分ほどかかる通勤の道すがら、レストランやカフェの前を通るのであるが、道路にはみ出たテーブル席に座り談笑する人が多く、規制によってどこが変わったのか、わからない状況であった。上記のようにsocial distancingが呼びかけられたが、若い人は全く気にしていないようで、従来どおり友人に会おうとハグする人も見られた。他のヨーロッパ諸国では以前にはみかけなかったマスク姿がもう違和感なく普通の光景になったとのことであるが、スウェーデンでは依然としてめったに見かけない状況である。

このようにスウェーデンが他のヨーロッパ諸国と異なり厳しい規制を敷かなかったことはその後日本を含めて国際的にも話題となった。一部の報道ではスウェーデンは多数の人が感染することによって免疫を獲得し、その結果流行が収束するという集団免疫を目指しているという指摘もあった。このスウェーデンの集団免疫志向説は、



© pixabay

スウェーデンのCovid-19対策の責任者であるスウェーデン公衆衛生局のAnders Tegnell氏が記者会見で問われるたびに否定していたが、感染の増加ピークを低く抑え医療システムへの負担を軽減することが最も重要でその結果として感染が長引いても良いので強い規制はしないという主張や、多くの人が感染すれば第2波が来た時には軽く済むという主張には集団免疫志向説と共通の考えがあるように思われる。

いずれにしても、このスウェーデンが近隣のヨーロッパ諸国、或いは世界中の多くの国とは全く別の「我が道を行く」政策を取ったことは、小生には第2次世界大戦におけるスウェーデンの政策と行動を思いおこさせる。歴史上良く知られているように、1940年4月9日未明に、ナチスドイツ軍はノルウェー、デンマーク両国に侵攻した。デンマークは、侵攻された日に降伏したが、ノルウェー政府および王室は英国に軍事支援を求め抗戦することを決め、オスロから退避した。隣国であり、歴史的にも言語的にも兄弟国といえるスウェーデンは中立を宣言し、両国を助けることは少なくとも表立ってはしなかった。一方、もう一つの隣国であるフィンランドは1939年にスターリンのソ連軍に侵攻され「冬戦争」となった。これは一度

休戦となったものの1941年になってナチスの対ソ戦争が引き金になってフィンランドの対ソ連の「継続戦争」が始まった。このように隣の3か国が戦争に巻き込まれていたにもかかわらず、スウェーデンは局外中立を通した。この中立がどの国の戦争活動にも全く関与しない真の中立であったかは議論のあるところのようであるが、ここでは深入りはしない。ただ、隣近所の国がどうなっても我関せず我が道を行くというのはスウェーデンの伝統的行動パターンなのかも知れない。このように、中立を通したおかげでスウェーデンは第2次大戦の破滅的惨禍を被らず、欧州の戦後復興の中で大きな役割を果たし経済的、産業的に躍進し、豊かな国になったことは良く知られている。翻って、Covid-19の世界的大流行(Pandemic)の中でスウェーデンが独自に取った緩い規制政策が成功であったのか失敗であったのかは未だわからない。2, 3年後には答えが出るであろう。それまで感染せずに元気にやり過ごし、スウェーデンの独自の「実験」の結果を見たいものと思っている。

参考文献: 北欧史、百瀬宏、熊野聰、村井誠人編、山川出版社、1998

着任のご挨拶



井手真二 副センター長

5月に副センター長を拝命いたしました。コロナウィルスの感染拡大に伴い、6月時点でまだセンターへ赴任できておりませんが、微力ながら精一杯頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



田島マリカ 現地職員

育児のため休暇1年半を頂いておりましたが、5月5日より復職いたしました。赤ちゃんの誕生以来、世界は劇的な変化を遂げ、新型コロナウイルスの感染拡大が日常生活に悪影響を与えています。皆様のご無事を祈り、今後のイベントでお会いしてお話できることを願っております。

第4回 Norway-Japan Academic Networkの開催

2020年2月26日、オスロのノルウェー研究評議会(RCN)において、第4回 Norway-Japan Academic Networkが開催された。本セミナーは、RCN、ノルウェー国際協力・高等教育推進庁(Diku)、JSPSノルウェー同窓会、当センターの共催により、日本とノルウェーの学術交流や研究者交流の促進を目的に開催された。

開会挨拶に続き、Julie Christiansen RCN国際部シニアアドバイザーからRCNの活動について、Unni Kvernhusvik Sagberg RCNアドバイザーからDikuの国際化への取り組みについて、そして山森健成在ノルウェー日本国大使館三等書記官からは文部科学省国費外国人留学生奨学金プログラムについての説明がされた。

続いて、Jim Tørresenオスロ大学教授が25年以上に渡る日本との研究交流について講演を行い、ノルウェー在住の日本人研究者である古賀詩織 Nofima研究員は、ノルウェー産パン小麦の製パン性への環境影響について講演された。その後、JSPSノルウェー同窓会幹部会委員であるCJ Beegle-Krause SINTEF上級研究員は、「Drift in the Ocean」と題する講演を行い、Thomas Ågotnesベルゲン大学教授がJSPSの招聘研究者としての自身の経験について講演された。(古賀研究員によるセミナー報告はP.6参照)

セミナー後のレセプションでは、ノルウェー在住の研究者や学生およそ30人の参加者が穏やかな雰囲気の中で親睦を深めた。



講演するCJ Beegle-Krause上級研究員

第5回 Japan Alumni and Researcher Assemblyの開催

2020年3月6日、コペンハーゲン大学において、Japan Alumni and Researcher Assemblyが開催された。5回目の開催となる当セミナーは、「Transnational Exchange in Art and Design」と題され、芸術分野における日本とデンマークの交流に焦点が当てられた。

宮川学在デンマーク日本国大使による開会挨拶に続いて、津本センター長が当センターの活動について説明し、その後在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会からそれぞれの事業や取り組みについて説明がされた。

日本からは、上智大学国際教養学部 of 林道郎教授が招聘され、「小野二郎と晶文社文化」と題する講演が行われた。続いて、コペンハーゲン大学のTania Ørum名誉教授、Mette Sandbye同大学教授、Kren Kitani Harsboデンマーク王立美術学院准教授が講演をされた。その後、パネルディスカッションが行われ、会場からも多くの質問や意見が寄せられた。閉会後はレセプションが開かれ、引き続き参加者間で意見交換が行われた。

本セミナーには、デンマーク在住の研究者や学生およそ60名が参加し、両国の学術交流の促進に寄与するイベントとなった。



パネルディスカッションの様子

JSPSフィンランド同窓会幹部会の開催

2020年6月4日、JSPSフィンランド同窓会(ACF)は、2020年度初めてとなる幹部会をオンラインで開催した。ACFからはJyrki Saarinen会長、Michael Gasik副会長、Joni Kujansuu幹部会委員、Simon Puglisi同委員、Elina Oksanen同委員が、当センターからは津本センター長、井手副センター長、田島現地職員が参加した。

Saarinen会長からの挨拶に続き、2020年度に開催が予定されている同窓会セミナー等のイベントにつき、新型コロナウイルス感染症の広がりを踏まえて今後どのように同窓会の活動に行っていくかについて、活発な議論が行われた。



© Tomoko Ishii

訪問記録

エストニア：タリン大学、タリン工科大学への訪問

2020年3月9日、エストニアの総合大学であり、およそ1,200人の留学生が学ぶ国際的な大学であるタリン大学を訪問した。Kätlin Keinast国際協力部長およびMadis Saluveer研究助成部長と面会し、JSPSの活動や国際交流事業を紹介するとともに、今後も学術交流の促進に向けて連携していくとの認識を共有した。

同日、続いてタリン工科大学を訪問し、Jaak Aaviksoo学長と面会した。過去にJSPSフェローとして日本で研究をした経験があるAaviksoo学長と、エストニアと日本の学術交流の促進について、意見交換を行った。



左からSaluveer部長、Keinast部長



Aaviksoo学長（中央）

第8回 Sweden-Japan Academic Network

スウェーデン宇宙物理研究所 (IRF) 准教授 二穴喜文

昨年ノーベル物理学賞を受賞した「系外惑星の発見」以降、我々の太陽系の外にも生命が存在できる可能性のある天体が次々と見付かっている。その一方で、その天体に行って探査を行うことができるのは、現実的には太陽系天体のみであり、直接的な探査が行える点が太陽系科学の強みである。ゆえに太陽系の科学は、望遠鏡を使い限られた情報しか得られないが数多く存在する系外惑星の科学とは相補的な関係にある。

太陽系天体の直接探査には人工衛星を使う。その計画は非常に長期にわたり、必要な人的、予算的リソースは莫大であるため、自然、国際協力が盛んとなる。私の所属するSwedish Institute of Space Physics (IRF)でも、日本の惑星探査計画への参画、また逆にIRFが開発する計測器への日本の宇宙機関、大学からの協力など、緊密な日瑞協力が行われてきた。そこで今回、ご招待を受けた第八回日瑞学術セミナーでは、「Chasing water in the Solar System」という題目で、太陽系科学の最大の関心事である「水」の話題を主軸とし、「日瑞の共同研究」を補助線として、太陽系探査の最先端を紹介させていただいた。

宇宙において水がなぜ重要なのか？ それは、水が生命の誕生や維持に必須だからである。その水が宇宙空間で今も作られているのではないのか？ まるでSFのように聞こえるが、これは現在の月で起こっていると考えられている。太陽から常時飛んでくる陽子が、月の岩石に含まれる酸素原子と化学反応することで、水分子が生成されている可能性が近年の探査から示唆されているのだ。その水分子はその後どうなるのか？ そのまま地中に潜るのか、宇宙空間へ逃げるのか、もしくは、非常に寒冷な極域まで運ばれ蓄積されていくのか。さらに、今後来るべき宇宙利用時代を見据えると、これらの水を我々は利用できるのか？ 月の水に関する興味は尽きない。続いて、金星や火星での水について紹介した。これらの天体は地球と大きさや太陽からの距離が似ているため、惑星形成時には同じような海を持っていたと考えられている。ではこれらの水は、現在、どこへ行ったのか？ 惑星のどこかに隠されているのか？そ



Sweden-Japan Academic Networkで講演する二穴准教授

れとも宇宙空間へ散逸してしまったのか？我々の直接探査から解き明かされた結果は、金星や火星からの水流出は現在でも起こっている現象ではあるが、海全体が宇宙に流出したという仮説を説明できる量ではない、というものであった。やはり水は惑星に残っているのか、現在知られていない流出経路があるのか、今後の研究課題である。そして最後に、欧州の将来計画である木星衛星探査JUICEを紹介した。木星の衛星の一つエウロパには地下に液体の海があると考えられており、生命が存在する可能性がある天体である。この探査では、水環境、生命環境を丹念に調べあげる。JUICEは2022年の打ち上げを目指し開発が進んでおり、2030年に木星に到着し観測を初める。何とも気の遠い話ではあるが、それほど太陽系は大きく、太陽系探査は壮大なテーマなのである。

講演後には他分野で研究、活躍されている方々や、ストックホルム近郊に在住されている日本人の方々から多くの質問を頂き、また、興味を持っていただいた旨、多数のお声をかけていただいた。惑星、太陽系、宇宙、生命、という対象が持つ、数多の人を魅了する不思議な力を再確認することができ、また、今後の研究活動への原動力とさせていただいている。またストックホルム研究連絡センターの皆様初め、共催各機関の皆様、水星探査についてのご講演を頂いたKTHのTomas Karlsson教授、そして、ご多忙のところ足を運んでいただいた参加者の皆様に感謝いたします。

2020年3月 雪深きキルナにて

第4回 Norway-Japan Academic Network

ノルウェー食品研究所(Nofima) 博士研究員 古賀詩織

本年2月に行われたNorway-Japan Academic Networkで日本人研究者として、筆者がノルウェーで従事する研究について発表する機会を頂いた。またその内容を、このニュースレターにも投稿させて頂く事となった。この会は、日本の大学および研究所と共同研究を行う外国人研究者と在ノルウェー日本人研究者の交流の場でもある。この会に集う研究者の研究テーマは多岐に渡り、多様な専門知識を持つ研究者との出会いは、私にとってとても良い刺激となっている。

私は、九州大学で稲の生理学を学び、修士課程を修了した。Norwegian University of Life Sciencesで博士課程を修了した後、現在はノルウェーの食品研究所(Nofima)で博士研究員として、修士課程の時と同じイネ科作物のパン小麦の研究に従事している。私の研究目標は、ノルウェー産パン小麦の製パン性を向上させることで、その品質を安定させノルウェーにおけるパン小麦の自給率を高めることである。製パン性とは小麦粉や小麦品種が有するパン原料としての適性のことである。

ノルウェーにおける小麦の研究は1950年代に遡る。当時のノルウェーの小麦品種は製パンには適せず、パン小麦は北米からの輸入に依存していた。その後の研究により、小麦品種の製パン性及び気候適応性が改良された。小麦の栽培技術も改良されて、ノルウェー国内でもパン小麦が生産されるようになった。1970年代には、パン小麦の国内生産の増加がノルウェーの農業政策となった。近年、ノルウェーでは、生地物性を強くする優良な形質を持つ小麦品種が栽培されている。2000年代以降、気象条件の良好な年には、ノルウェー産パン小麦が国内パン小麦消費量の70%を占めるようになった。しかしながら、ノルウェーのパン小麦品種の製パン性は気象条件などの環境要因によって大きく変動してしまう点が未だに課題として残されている。

製パン性を決定する主要因子は、種子貯蔵タンパク質であるグルテンの品質である。私は、製パン性を低下させる環境要因(気温、降雨、窒素施肥量、糸状菌

の感染など)を特定し、それらの環境要因がグルテンの品質へ及ぼす効果を研究してきた。ノルウェーでは小麦は七月に開花し、その後登熟期を迎える。最初に、パン小麦の製パン性が冷夏の年に顕著に低下することに着目し、登熟期の低温と製パン性の関係について研究した。そして、登熟期の低温が製パン性低下の直接原因ではないことを明らかにした。次に、冷夏の年は降雨量が多く、糸状菌の感染による有病率が高くなることに着目して、糸状菌感染が製パン性に及ぼす影響を調査した。その結果、特定のフザリウム属菌がグルテン分解酵素を分泌することを見出した。このグルテン分解酵素は、登熟期の植物体内でも製パン工程下でも種子のグルテンを分解した。このことから病害性を持つ糸状菌の感染が、製パン性の品質を低下させる原因の一つであることが判明した。現在は、種子黄熟期以降の降雨が子実水分を上昇させ、製パン性を低下させているという仮説を基に、登熟期の降雨が製パン性に及ぼす影響について調査を行っている。

私のノルウェーでの研究生活も約10年の歳月を経た。これまでは、ヨーロッパの研究者と共同研究する機会には恵まれたが、日本の研究者とは共同研究を行う機会がなかった。Norway-Japan Academic Networkで得られたご縁を大事にして、近い将来日本の研究者とも共同研究を行いたいと願っている。



Norway-Japan Academic Networkで講演する古賀研究員

北欧・バルト三国で活躍する 日本人研究者の紹介

スウェーデンのカロリンスカ医科大学で客員研究員として研究に励まれている館明日香さんにお話を伺いました。



館 明日香

カロリンスカ医科大学
客員研究員

現在、スウェーデンではどんな研究をされていますか？

基礎分野では放射線及び周産期脳障害に対する治療法についての研究を、疫学分野では周産期が児の発達に及ぼす長期的な影響についての研究を行っています。

現在の研究分野に興味をもったきっかけを教えてください。

産婦人科医として周産期脳障害(脳性まひ)は非常に身近な病態であり、脳障害という研究テーマに取り組みたいと思っていました。また当初より周産期という一生のうちで極めて限定的な期間が赤ちゃんとお母さんに長期的にどんな影響があるのかとても興味がありました。日本ではやっと周産期-新生児科の統一したデータベースを立ち上げる段階のため、ビッグデータを用いて周産期の長期的な疫学研究のできる北欧を選びました。

略歴

2009年3月	名古屋大学医学部医学科卒業
2009年4月-2011年3月	豊橋市民病院 初期研修医
2011年4月-2013年1月	同上 産婦人科 医員
2013年11月	小牧市民病院 産婦人科 医員
2016年10月-2019年3月	名古屋大学産婦人科 医員
2019年4月-	カロリンスカ医科大学 客員研究員 名古屋大学大学院医学系研究科産婦人科学講座 研究生

現在の所属機関を選択した理由は何ですか？

大学時代に初めて自分のお金で海外旅行した先がスウェーデンでした。カロリンスカでポスドクだった友人を訪ね、ミーティングに出席し、さっぱり内容が分からないにも関わらず漠然と「いつかここで研究したい」と思いました。そして小さいころからPippiが大好きだったのでJunibackenに連れて行ってもらい、「いつか子どもと一緒に来たい」と思いました。

最終的には、留学するにあたり家族皆で楽しく暮らせそうという理由で決めました。



週末は森か公園に遊びに行きます。

北欧・バルト三国で活躍する 日本人研究者の紹介

研究を行う上での一番の課題を教えてください。

家族皆が楽しく暮らせること、それに尽きます。私はここでの研究もそれ以外の生活もとても楽しいです。子どもたちもそれぞれ学校でたくさん友達ができ毎日楽しんでます。ただし私のわがままについてきてくれた主人は、、、同じラボで研究をやってはいますが、臨床畑一本の人なので物足りなさもあったようです。そんな彼もやっと現場に出られることになり、正直ほっとしています。

海外で生活するにあたり家族全員が明確な目的を持っている方が珍しいと思うので、きっとこの課題はどのご家庭にも少なからずあるのかなと思います。



大好きなラボの仲間たち（筆者右4人目、筆者夫左4人目）

日本と比べて、スウェーデンの研究環境について、どのような印象をおもちですか？

日本では日勤帯で臨床を、終わってから研究をしていたのと週1-2回の当直もあり、家族とゆっくり過ごす時間はあまりありませんでした。スウェーデンでは臨床はやっていませんが、やりたかった研究ができるだけでなく家族とともに豊かな時間を過ごすことができます。それは家族の協力はもちろん、ボスを始めとしたラボの仲間たちの理解とサポートなくしては成しえませんが。

スウェーデンは、私にとってやりたい事と家族との時間のどちらも持つことができる最高の環境です。

最後に、これからスウェーデンで研究を始めようと考えている研究者にメッセージをお願いします。

ここでの生活を振り返った時、お互いにとって良い時間だったと思えるように過ごしていきましょう。



夫婦で女王陛下より奨学金を授与されました。
(筆者前2列目左3人目、筆者夫最後列右3人目)
(出典：[スウェーデン王室ホームページ](#))



10年ぶりに再開した合気道。来年二段審査を受ける予定です。
(出典：[Stockholm Aikikai Facebookホームページ](#))

ノーベル賞2020 発表日程が決定

2020年度ノーベル賞発表日程が決定し、ノーベル財団のホームページ上で公表された。

医学・生理学賞

日時：2020年10月5日（月）11:30

場所：カロリンスカ医科大学

文学賞

日時：2020年10月8日（木）13:00

場所：スウェーデンアカデミー

物理学賞

日時：2020年10月6日（火）11:45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー

平和賞

日時：2020年10月9日（金）11:00

場所：ノルウェーノーベル委員会

化学賞

日時：2020年10月7日（水）11:45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー

経済学賞

日時：2020年10月12日（月）11:45

場所：スウェーデン王立科学アカデミー

【出典】

Nobel Foundation: [Prize announcement dates](https://www.nobelprize.org/prizes/announcement-dates)



© Tomoko Ishii

世界大学ランキング（北欧諸国）

2020年6月10日、英国の大学評価機関Quacquarelli Symonds (QS)は、QS世界大学ランキング2021を発表した。スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランドの北欧諸国の大学は、昨年同様、TOP100に3校がランクイン(TOP200では12校)。日本の大学はTOP100に5校がランクインした(TOP200では10校)。なお、全体の上位3校は米国のマサチューセッツ工科大学(MIT)、スタンフォード大学、ハーバード大学であった。

国	大学名	QS		
		2019	2020	2021
スウェーデン	ルンド大学	92	92	97
	スウェーデン王立工科大学	104	98	98
	ウプサラ大学	117	116	124
	チャルマース工科大学	128	125	139
	ストックホルム大学	200	191	181
デンマーク	コペンハーゲン大学	79	81	76
	デンマーク工科大学	112	112	103
	オーフス大学	141	145	147
フィンランド	ヘルシンキ大学	110	107	104
	アアルト大学	140	134	127
ノルウェー	オスロ大学	135	119	113
	ベルゲン大学	171	163	194

【出典】

QS: [QS Top Universities \(2021 ランキング:2020年6月10日発表\)](https://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2021)

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団が 日本の大学との国際研究協力促進事業を11件採択

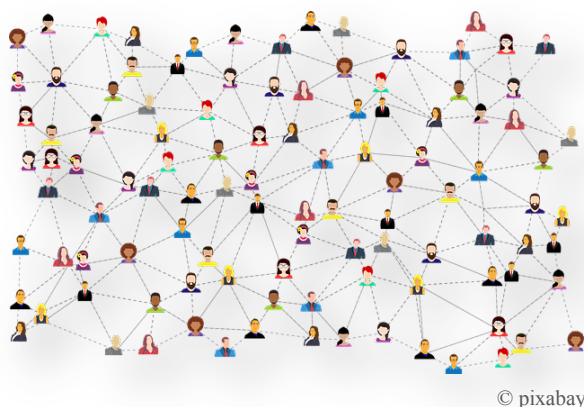
2020年5月18日、スウェーデン研究・高等教育国際協力財団(STINT)が海外(EU/EFTA域外)の大学との国際研究協力促進事業について採択結果を発表した。

採択件数は20件、助成総額は930万スウェーデンクローナ(約1億1160万円)であったが、うち11件が日本の大学等(岡山大学・京都大学・北海道大学・東京大学・広島大学・東北大学・理化学研究所)とのプロジェクトであった。

本事業はスウェーデン研究者・大学の新たな国際研究協力を促進するものであり、海外の大学に対しても同レベルのファンド獲得を義務付け、若手研究者の交流も重視するなど、互惠的・双方向的なプロジェクトに対して助成するものである。

【出典】

STINT: [STINT invests SEK 9.3 million in research cooperation with foreign universities](#)



© pixabay

スウェーデン王立科学アカデミー会員を全欧アカデミー理事に選出

2020年6月3日、全欧アカデミー(ALLEA)は理事の選出を行い、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)会員でストックホルム大学ヴェナーグレン分子生物学研究所のYlva Engström教授を新たに理事として選出した。2016年から全欧アカデミーの理事であるフィンランド科学アカデミー会員のKrista Varantolaタンペレ大学教授もこの度三選を果たした。

1994年に設立された全欧アカデミーは欧州各国50以上のアカデミーから構成される団体で、欧州及び世界の学術振興を目的としており、総会で2年に一度理事の選出が行われている。

【出典】

KVA: [Ylva Engström new member of the board of ALLEA](#)

ALLEA: [ALLEA admits new members and elects a new Board](#)



Ylva Engström © Eva Dahlin

北欧諸国、新型コロナウイルス研究への特別助成を決定

2020年4月1日、フィンランドアカデミーは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関する研究を対象に、845万ユーロ(約10億480万円)の特別な助成を行うことを決定した。4月6日より公募を開始し、5月26日に助成先となる12の研究機関を決定した。この間、26の機関から319件の応募があり、44件が採択された。急速な対応を迫られる新型コロナウイルスを取り巻く状況を鑑み、フィンランドアカデミーでは、アカデミーの助成によって現在進行中の研究プロジェクトを対象とすることで審査プロセスを簡略化し、迅速に研究を軌道修正することを可能とした。

スウェーデンでは、政府予算からおおよそ3000万スウェーデンクローナ(約3億2360万円)が、新型コロナウイルス感染拡大に取り組む研究への助成として追加的に当てられた。5月下旬から公募を開始したスウェーデン研究評議会には、2週間という短い公募期間であったにもかかわらず257件の応募があった。7月上旬には採択結果が発表予定される予定である。フィンランド同様に、スウェーデン研究評議会の助成の下、現在進行中のプロジェクトのみを対象とした。

ノルウェー政府は、4月6日、3000万ノルウェークローナ(約3億630万円)を追加的にノルウェー研究評議会に割り当て、新型コロナウイルス感染症との戦いに取り組む研究への緊急助成を行うこととした。申請資格を公認のノルウェー研究機関に限定する一方、公共・民間セクターとの提携を推奨した。

またエストニアでは、6月初旬、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う問題に取り組む研究を対象に、210万ユーロ(約2億4500万円)の助成を行うことを決定した。既存の研究をさらに発展させることを主に目指す。

【出典】

Academy of Finland: [Academy of Finland announces funding decisions on special call for COVID-19 research](#)

Swedish Research Council: [Great interest in the call about coronavirus and COVID-19](#)

Norway Research Council:

[COVID-19 Emergency Call for Proposals: Project Outlines for Call Concerning the Fight Against Coronavirus Disease \(COVID-19\)](#)

Estonian Research Council: [Government supports research and development related to coronavirus](#)



© pixabay

公募情報

2021年度 二国間交流事業（共同研究・セミナー）

JSPSは海外の学術振興機関との間で協定を締結し、日本と当該国の間で多様な学術の国際交流を推進しています。交流の主たる形態には、①共同研究、セミナーおよび②特定国派遣研究者があります。

共同研究・セミナー

日本の研究者が、海外の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援する事業です。

事業形態: (A) 対応機関との合意に基づく共同研究・セミナー、(B) オープンパートナーシップ共同研究・セミナー

申請期限: 2020年9月2日 (所属機関によって機関内での締切日が異なります)

対応機関 (A): フィンランドアカデミー、リトアニア研究評議会ほか

URL: <https://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html>

特定国派遣研究者

日本の研究者が、相手国の研究者を訪問し、研究、意見交換等を行うための経費を支援し、将来にわたって持続発展するような共同研究や人的ネットワークの基盤づくりを促進する事業です。

対応機関: フィンランドアカデミー、ノルウェー研究評議会

申請受付期間: 2020年8月26日～2020年9月2日 (所属機関ごとに機関内での締切日が異なります)

派遣時期: 2021年4月1日～2022年3月31日に出発

URL: https://www.jsps.go.jp/j-bilat/tokuteikoku/shinsei_bosyu.html

2021年度 研究拠点形成事業

先端的かつ国際的に重要な研究課題、または地域における諸課題解決に資する研究課題について、世界的水準または地域における中核的な研究交流拠点を構築し、次世代の中核を担う若手研究者の育成を目的とします。本事業は、共同研究、セミナー、研究者交流を組み合わせ実施します。

事業内容: (A) 先端拠点形成型、(B) アジア・アフリカ学術基盤形成型

申請受付期間: 2020年9月4日～10月1日 (所属機関ごとに機関内での締切日が異なります)

URL: <https://www.jsps.go.jp/j-c2c/>

2021年度 外国人研究者招へい事業

本事業は、諸外国の研究者を日本に招へいし、日本の研究者との共同研究、討議、意見交換等の機会を提供することにより、外国人研究者との研究の進展を支援すると同時に、日本の学術研究の推進および国際化の進展を目指します。

招へい目的およびキャリアステージに合わせた多様なプログラムについては、下記のURLおよびパンフレットを参照ください。

URL: https://www.jsps.go.jp/j-inv_researchers/index.html



日本人研究者の会について

当センターでは、北欧諸国・バルト三国で研究活動を行っている日本人研究者を対象に、ニュースレター、各種セミナー、イベントの情報を定期的にお知らせしています。

登録はこちらから: <https://www.jsps-sto.com/to-japanese-researchers/>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読

ニュースレターの定期購読を希望される場合は、以下のウェブサイトから登録してください。

電子メールにて配信します。

<https://www.jsps-sto.com/newsletter-2/>

「EU一般データ保護規則(GDPR)」の適用を踏まえた個人情報の取扱いについて

2018年5月25日よりGDPRが施行されたことを踏まえ、当規則に基づいて個人情報の取扱いに留意しています。GDPRの施行を踏まえた個人情報の取扱いについてお問い合わせがございましたら、当センターまでお知らせください。



© Tomoko Ishii

表紙写真:

エストニアの首都タリン、旧市街の中心に位置するラエコヤ広場。旧市街はタリン歴史地区として世界遺産に登録されています。

JSPS Stockholm Newsletter 第66号(2020年 春夏合併号)

編集長: 津本忠治

編集: 石井知子

発行日: 2020年7月3日(金)

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <https://www.jsps-sto.com>

E-mail: jsps-sto@jsps-sto.com

Facebook: [JSPS Stockholm Office](https://www.facebook.com/JSPSStockholmOffice)



JSPS STOCKHOLM